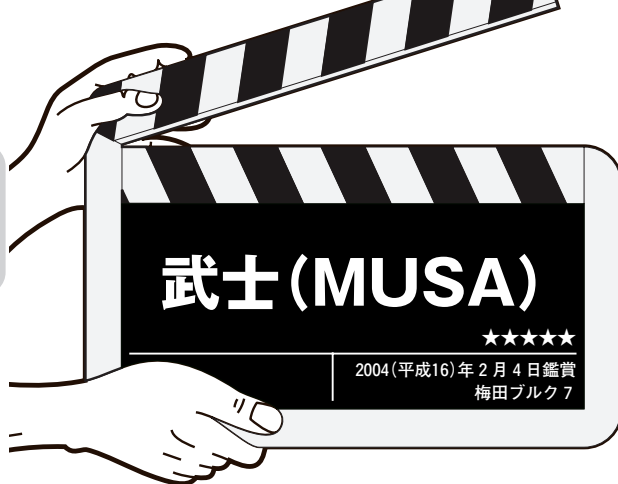




製作＝チャ・スンジェ／監督・
脚本＝キム・ソンス／出演＝
章子怡／チョン・ウソン／チ
ュ・ジンモ／アン・ソンギ／ユ
ー・ロングァン／パク・チョン
ハク（ギャガ・ヒューマックス
配給／2001年韓国映画／133分）

美しい明の皇帝のお姫さまを守る高麗の2人の男。1人は将軍、1人は奴隷と対照的だが、姫を守る気持は同じ。14世紀末の中国の大地で繰り広げられる壮絶な男たちの闘いは、美しく、そしてまた悲しいもの……。『初恋のきた道』の章子怡をお姫さまに迎え、韓国の若手俳優と実力派が結集した一大スペクタクルは見どころいっぱい。超おすすめ作だ。

♣ 前提としての歴史背景その1——中国史のお勉強

この映画の時代背景は、14世紀末の中国。パンフレットには、その時代背景がうまくまとめられているので、それも一部拝借しながら少し説明する。

モンゴルの太祖ジンギスカンの孫にあたるフビライが元を建国したのは1271年。その都大都は現在の北京だ。以降、中国の漢民族はずっとモンゴル民族に支配されてきたが、元が変わって漢民族が打ち立てた王朝は明。明の誕生は1368年で、その初代皇帝は太祖、朱元璋。このように中国では明が元を駆逐したが、蒙古の勢力はなお、「万里の長城」の北方に残り、明との戦いを繰り返していた。なお、この映画のヒロイン、章子怡は、この朱元璋の王女、芙蓉姫という設定だ。

♣ 前提としての歴史背景その2——朝鮮史のお勉強

他方、朝鮮半島では、王建が918年に高麗を建国して、初代の王（太祖）とな

り（918～943）、その後、新羅と百済を滅ぼして、朝鮮半島を統一した。そして、6代目成宗の時代（982～997）には、儒教を政治理念に掲げて、中央集権の体制を確立し、9代目徳宗の時代（1032～1034）には、「万里の長城」ならぬ、「千里の長城」を築き、11代目文宗の時代（1047～1083）には、多くの法律を定めて国内の政治の基礎を固め、高麗の最盛期を迎えた。しかし、その後は内紛が続き、13世紀には高麗は蒙古に侵略され、元の支配下に入った。

高麗のラストエンペラーは34代目の恭讓王（1389～1392）だが、その少し前の31代目^{コンミン}恭愍王（1352～1374）は日本でも有名だ。^{コンミン}恭愍王は明の勢力が強まり、モンゴルの力が弱まる情勢の中で機敏に動き、モンゴル式の弁髪を廃止するとともに、モンゴルの干渉を排して自主性を回復し、領土も奪い返した。また国内的にも政治、経済全般にわたる「政治改革」を断行した。この^{コンミン}恭愍王の「政治改革」は、日本人には少しわかりにくい「海のむこう」にあった歴史上のストーリーだ。もっとも、この^{コンミン}恭愍王の改革は、「抵抗勢力」＝旧貴族と、親モンゴル派の反発を招いて、結果的には成就せず、^{コンミン}恭愍王は親モンゴル派の手によって1374年に殺害された。建国後まもない明にとって、元の支配する勢力が、まだ朝鮮半島の高麗に残っていることは愉快なことではなかった。

ちなみに、日本とモンゴルとの関わりは、フビライ皇帝の時代。誰もが知っている元寇は、文永の役が1274年、弘安の役が1281年。だから、この映画の物語の約100年前ということになる。

「字幕」解説もきっちりとお勉強

以上の説明に加えて、映画の冒頭、字幕で流れる次の状況説明を読めば、時代状況の把握はバッチリだ。「西暦1375年、高麗建国457年。中国では朱元璋が明を建国し、元（蒙古）を万里の長城以北に追いやっていた。高麗と明の関係は、^{コンミン}王の死と明の使臣の殺害事件によって悪化。高麗は南京へ使臣を送ったが、そのすべてが投獄された」

韓国を代表する2人の若手スターと高麗の身分制度

この映画には、2人の魅力的な若い男性が主役として登場する。1人は高麗の

使節団を護衛する龍虎軍の將軍で、劍の達人のチェ・ジョン將軍（チュ・ジンモ）。もう1人は使節団の副使の奴隸で、槍の達人のヨソル（チョン・ウソン）。どちらも韓国を代表する若手人気スターだが、この映画での役柄は対照的。すなわち、チュ・ジンモはエリート中のエリートだが、チョン・ウソンは奴隸。ちなみに高麗の身分制度は、1番上に王族を頂点とする貴族、次に仏教の僧侶、その下に大多数の人民がおり、その中でも最下層が奴隸（奴婢）。ヨソルは、その「ご主人」の副使が、その死亡に際して、「私に仕えるこの男を解放した。もはや奴隸ではないのだ。自由な身分の一個人として接するようお願いする」と言い残して、ヨソルを奴隸の身分から解放したが、果たしてそれは認められるのか……。

お姫さまは、あの章子怡 チャン・ツイイー

この映画の紅一点のヒロインは、明の初代皇帝、朱元璋の娘、芙蓉姫。これを演ずるのはあの張藝謀監督の、『初恋のきた道』（00年）で一躍トップスターとなった、絶世の美女の章子怡 チャン・ツイイー。この「お姫さま」のちょっとしたワガママがこの物語の発端だ。男たちの壮絶な闘いが展開される中、このお姫さまも、肉体的・精神的に苦難の途を歩むことになるが、その反面、2人の若い魅力的な男のナマの姿と接することに……。果たして、彼女はどちらの男により惹かれていくのか……。それは、この映画を観てのお楽しみだ。

2人を支える俳優たち

主役の座はチュ・ジンモとチョン・ウソンの2人に譲っているものの、「隠れた主役」ともいえるのが、チェ・ジョン將軍の龍虎軍と共に使節団を護衛する、下級武士で編成された州鎮軍を率いる、弓の名手、隊正チンリプ。この隊正を演ずるのは、韓国の名優アン・ソング。彼は1952年生まれだから、今は50歳前後。私は、彼の出演した『ディープ・ブルー・ナイト』（85年）、『神さまこんにちは』（87年）を観たが、それは30代のアン・ソング。だからこの映画での円熟したアン・ソングとは全く趣が違うものだった。彼のこの映画での控え目な渋い演技はずば抜けており、アカデミー賞なら助演男優賞まちがいなし、というすばらしい

ものだ。また、チェ・ジョン將軍の片腕であり、忠誠心にあふれ、劍の腕もたつ「いい男」が、別將カナム（パク・チョンハク）。彼の忠誠心や命を賭けた死闘には思わず目がウルウルしてしまうほど。さらに蒙古軍のランブルファ將軍を演ずるユー・ロンガンも、ニクたらしいが、すごくいい味を出している。すなわち、相手の奴隷ヨソルの実力を買って、本気でモンゴルの將帥になることを勧めたり、見事な死闘を展開する敵の武將、別將カナムに死の直前に劍を拾わせたうえ、自らの手でとどめを刺したり、武將としての心をもった將軍像をうまく演じている。

ワイヤーやCGではない、本格アクションの美しさ

チャン・イーモウ
張藝謀監督の『HERO（英雄）』（02年）でのアクションは、カラー美術や衣装の美しさと相まって、素晴らしいものだったが、所詮、ワイヤーやCGをふんだんに使った架空のモノ。しかしこの映画は全然違う。チェ・ジョン將軍の劍、ヨソルの槍、隊正チンリップの弓という武器の多彩さもさることながら、その劍や槍はあくまで「実用本位」のもの。すなわち、チェ・ジョン將軍の劍はデッカク、両刃だし、別將カナムの刀は、ざんばとう斬馬刀のようなすごいもの。また、ヨソルの槍も突き刺すだけではなく、両刃がついており、一振りでクビをはねることができるという代物だ。また、闘う戦法もキレイごとではなく、「何でもあり」の「ケンカ殺法」。騎馬で突進してくる蒙古軍に対しては、馬の足を狙ったり、相手を一撃で倒すために急所を狙うのではなく、刀の重さで鎧ごと叩き切ったり、というリアルなもの。日本の「サムライ」の闘い方や、ヨーロッパの中世騎士たちの闘い方とは全く異質の、野性的で本能的な闘いが展開される。映画の中で次々と展開されるこれらの戦闘シーンは、ワイヤーやCGではないホンモノの「肉弾戦」だから、本当に迫力と見応えがある。そして、最後のモンゴル軍の攻撃にさらされる「土城」での老人や女、子供を巻き込んだ悲惨な全滅（？）シーンは、逆に悲しみを誘い、思わずホロリと……。

日本映画にはない野性的な魅力

この映画は01年の韓国映画で、2002年度韓国大鐘賞10部門ノミネート、編集

賞・衣装賞を受賞したもの。多くの人物が登場し、複雑なストーリーになると、外国映画の場合、役者の顔がよくわからなかったり、ストーリー展開が読めなかったりという苦勞をするが、この映画はそんな苦勞は不要。ストーリーはシンプルで、登場人物のキャラは、脇役の1人1人に至るまで明確だし、それぞれが魅力的。こんな、中国の明の時代を背景として、高麗からの使節団を扱った韓国の時代劇が、日本で魅力いっばいに上映されるのは珍しいことだ。大阪でも多くの映画館で、とまではいかないが、梅田ブルク7等での公開だから立派なもの。

大ヒットした張藝謀監督の『HERO (英雄)』は、この『武士 (MUSA)』の美術チームによって製作されたとのこと。そしてそれは、2004年1月19日産経新聞の戸津井康之氏の評論によれば、「製作は三年前で、チャン・イーモウ監督の『HERO』以前に撮影されている。チャン監督は『MUSA』のラッシュ（完成前の編集フィルム）を見た後、『HERO』で準備中の美術チームを解雇、スタッフを“総入れ替え”したという」と紹介されている。それほどこの『武士 (MUSA)』の美術チームはすごい能力をもっているわけだ。私としては多くの日本人にこういう映画を興味をもって観てもらい、そのスケールの大きさを学ぶとともに、しっかりとした歴史観を養ってほしいと思うのだが……。

2004(平成16)年2月5日記

ミニコラム

アジアンビューティ、章子怡に乾杯

今や「アジアンビューティ」を代表する女優は、花王の「アジェンス」のコマーシャルに登場する章子怡。『初恋のきた道』(00年)での赤い綿入れを着た初々しい姿は絶品だったが、今や徐静蕾、周迅、趙薇ら四小名旦(四大美人女優)のトップ。『HERO (英雄)』(02年)では先輩の張曼玉に主役を譲った(?)ものの、

『武士 (MUSA)』でのお姫さま役と同様、張藝謀監督の最新作『LOVERS』(04年)では、盲目の踊り子として「愛」と「謀」の中心人物となって、再びワイヤーアクションに挑戦！ところであなたは、『武士 (MUSA)』の章子怡と『LOVERS』の章子怡のどちらが大好き……？